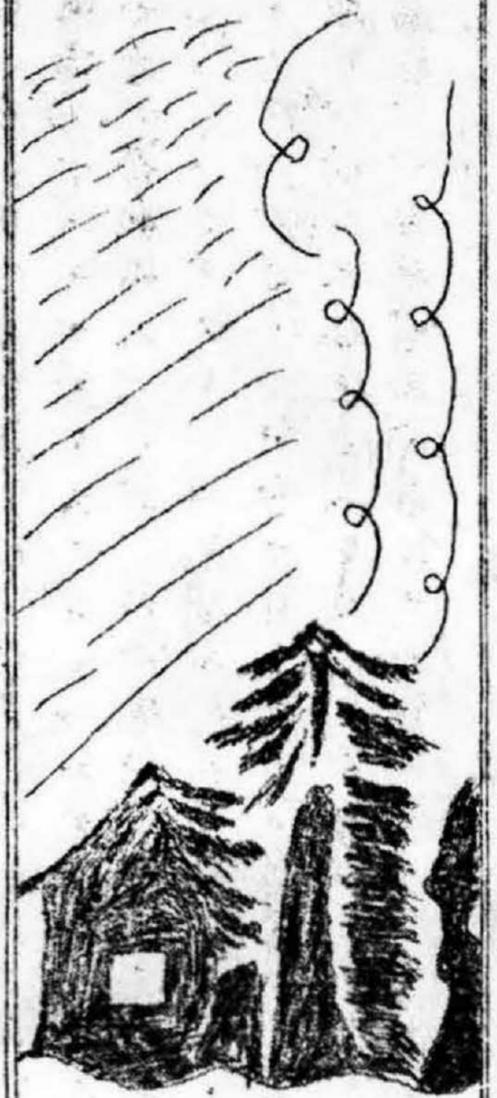


# 會報



第四年第三号

昭和八年四月十八日発行

通巻第二十七号

## 奥添地越歸醉醒

こんな大々敷い題がついてゐるが実は岩原から石打へのスキー行の記録に過ぎない。

今年の春季皇靈祭はどうしたもんかと思ひ煩つてゐるとペンチヤンから電話がかゝつて十九日の日曜に岩原から石打へ行く気はありませんか、曾田外ニ三人来ますといふ話、曾田といへばギヤング揃の針葉樹會の中でも錚々たるものだとかねがね噂にきき及んでゐたので其方の好奇心と、実は春季皇靈祭と中一日置いて日曜に続くので日光湯本へ行かうかと考へてゐた所生憎二十一日は法事があるのでオヂヤンになつた上公務多端で二十日を休むことも不可能となつたので、雪に期待は出来ないが、岩原から石打へといふコースは豫考へてゐたルートだったから二つ記事で承知した。一行は村尾、曾田兄弟、中川、高柳、石山の六

人、村尾、石山両氏は十八日から山の家に泊り込むといふ熱心さである。さて十八日のスキー列車には曾田の方が私を待たつたといふ珍記録を作つてへ九時迄會社で會議があつたんだ。無事来たんだ。中里の先の、例の曲り角で汽車を降りると有難や前夜降つたらしいが、いやに生暖いのが氣に喰はぬといつた所で相手が天氣だから何ともし様がない。山の家で朝食にして八時出発、大勢なのでシールが無いの、繩を張るのと午間どつて中腹の小屋へついたので九時、愈々飯士山越にかゝる。此項より雪霏々として降り始め、双足を糸せずといふ程ではないが、見透しはさっぱり利かず露も深い。觀念してワンサ／＼と登る。一行中には私と同様のスキー一年生が居るので甚だ心強い。十時半鞍部に立つ。さあ又からが大仕事だ。得意のシールを外して顔面制動の準備をする。ペンチヤンを先頭に滑降に移る。千米位あるので、粉雪とはいかなくとも、下の水雪に較べればはるかに調子はいいのだが、小さな凹凸に乗りあげると下の苗雪ががり／＼と鳴って氣持が悪い。眺望は少しも利かない。ゆるやかな尾根通りを北へ／＼と降る。覺悟した程の転倒もせず。やがて尾根は俄

然急斜面となり滑降不可能となつたので右手の疎林中を降ること暫時、奥添地蔵の夏路らしいのどぶつかつたので足を降るへ此間、小生コースを誤り行詰りの谷に滑り込む。此辺から、雪は小雨に交つて完全な水雪となり曲り角で突込んだスキーを持上るのが一苦勞である、眼界はや、崩けて、道かの下に石打のスキー場が見える、夏路のサクサクを降り終へて木ツト一息つく、後は大した事もなく平凡な滑りを続け一時石打スキー場の小屋に着いた。

小屋の前のゲレンデで折よく講習中だったので俄講習生になりすまして練習にや、時を過し四時五十分の臨時に悠々間に合ふつもりで出かけたが雪は先制申上を通りの水雪で、コースは殆んど傾斜無し、原ツパ横断ときたので意外に手間どり先頭が石打取へ着いたのは終車に僅々五分前、致は乗るや否やピトと終車した始末で曾田の如きは流汗淋漓、十八キロリースのゴールもかくやと思ふばかりの奮闘振だったが、一行皆間に合つて目出度し、さてスキー列車なる故に食堂の設備ありテナ訳で、こゝでサツマ汁を肴に杯を交すこと十数杯、遂に二合瓶三本を三人へ名譽のため特に名を秘すので平げ沼田あたりからリュックを枕に

軒聲雷の如く、赤羽に至りて介添坂の高柳、石山両氏に夕、き起されて漸く正気を取り戻し、樂しかりし一日を回想しつゝ、各自御機嫌美はしく御帰館遊ばされた次第であつた。

(七 兵衛)

登山者のメツカ、ツエルマツト (三)

此の他又 J. C. Hess が當時 Wallis, Wandland の如き僻遠の谿谷地方に見られた風俗習慣に就て語つた一挿話がある。その一部を次に述べやう。

「……チーズも亦バタと全じ様お同僚にあつて非常に固くあつてゐる為、手斧で碎かねばならぬ場合がある。ある家の家柄は其の家にあるチーズの古さによつて評價されるもあり、又客人の親疎貴賤によつて食卓に上るチーズの年代が違つて来る事もある。中には佛蘭西革命(一七八九)頃からのものを藏してゐる家もある。此等は非常に大切な祝祭日とか誕生、結婚式或は葬式といつた様な場合にのみ出されるのである。子供が一人生れると其の度にチーズの一塊を用意して置き、新に此の世に生れ出た幼児の名前を之に刻みつける。此のチーズが食卓に初めて上るのは此の子供の成長后結婚式の場合で其れ迄は絶対手付け

ない。又子供が女であつて他から求婚でもされた場合に其の花嫁の承諾は自分のチーアの一片を出す事によつて表徴される場合さへもある。求婚者たる若者は花嫁たるべき人の父に向つて日曜日の午後に招待して貰へまいかと質ねる。此の時相手の方で断りでもしやうものなら爾来両家は永久に仇同志の間柄となる様な事も珍らしくない。然し乍ら午後の席に招かれはしたが尚戀人二人の間にある心配は、お父さんはその時チーズを出して呉れるかしら？、といふ事にあつて、若し其れさへ食卓に上れば最早二人は晴れての許嫁となるのである。し詢に微笑まじき昔語りではあるまいか。

又アガシーやヴオクトが其の辺りで羊を買ふ事に成功した。其処へ自分等の案内者となるべき人達やニ、三の村人の一隊が近づいて来て吾々の食草の残を最後の一片に至る迄食ひ盡して了ふと、元来リツツエルやブルナーグラート、テオデュール峠、ツムツト氷河等を訪れる筈であつたのが皆家の方に向つて引返して了つた。と云つてゐる。

又當時 Calanney が其の学生を引率して此の地方を訪れたが彼は確にブルナーグラートの自然美

といふものを感得したに違ひあつた。それは彼のわのした繪画によく表現されてゐるのである。此の時代になつてモンテ・ローザやガリス地方の地形を論ずる記述もそろ／＼現はれはじめ、殊にツエルマツト地方は植物の豊富、且珍種の存在によつて弘く世の中に知られる様になつたが、尙未だ單なる旅行者などの訪れるものは極く稀れであり、ましてや高山地帯を歩くといふ様お話は何処にもなかつたのである。

扱て一八五〇年の初頭に至つて茲に突如として一大変化が捲き起つた。アルピニズムもいよいよ勝利への行進を開始したのである。又は云ふまでもなく所謂探險家乃至は発見家と稱せらるゝ人々の出現であつて、宛も氷河の膨張の如き勢を以て遠隔の地を近づき易きものとし大自然の美を大眼の眼に、心に啓示する先導者となつたのである。當時早くも一部の人が新大陸の発見等に遠く海外に活躍して居た時代に、他方山岳の研究に眼を転じた少数者があつた。山岳は未だお伽噺或は驚怖の土地として神秘の雲霧に閉ざれて居た時代である。其処には研究されたものは一つもなかつた。はじめに此等未知の豁谷に踏入つた人々こそは最も貴重なる報酬を以て報ひられたのである。

此の先駆者の侵入こそは道路開鑿の端緒を開き、交通の便も次第に改良せられ、漸く多くの人々が此等の地に容易に親しみ得る様になった。又此の勞力其のものが直に健康の糧であり、又日々其の軍調子を増し行く職業上の生活への変化と愉悅を齎すスポーツであると考えられる様になり、又新しき予想外の山岳美なるものが人々に理解せられる様になって来たのである。今まで一般の人々は此の谷奥の荒家たる高地に於て重苦しい迫力と凄惨なる事物以外には何も見づ。只不安と戦慄を感ずるのみで、宏大なる地球の表面に於て此の部介のみは畢竟人類の為に作られたものではないと考へて居た。所が今や突如として此等の迷妄は打破せられ、雄偉、壮大なるもの、殊には又原始的、奔放なる自由感といふものが人々の間に屢々向題視せらるゝ様になって来たのである。憧憬、幻想に駆られ其の地に踏み入った者は、己が原始の姿を其の儘其処に見出し、軟弱なるロマンティズムに陥入る事なく男性的力強さを感得すると共に、英雄的の美、其の美の光彩の中に野生の力を示現する特質をば発見する事となったのである。(三—四頁)

(熊)

觀相漫筆

毎度お山の事はかり書いて居りますので今度は少し方面を変えまして人間の顔や手の形や線に依つて其の人の性質や過去の罪業の数ををひたりと當てる方面に付題して觀相漫筆

漫に書くのであるから書いて行く筋道には何等の系統も組織もないもので只拙者約五ヶ年に渉る人相手相の研究の一端を披瀝して思ひ浮べたまふ書き連らぬ敢て針葉樹會員の嚴正なる批判を持つ次第である。

昭和二年は拙者の斯道に於ける研究の第一歩の年である。ゼミナール右恩師孫田先生たましく拙者の手をとつて種々易道の神祕を説き聞かせる事久しきに渉り茲に内職として此道を研究し万ヶ一會社から首を切られ申候節は新宿街頭なんてつけち奥いし処はよしして銀座の一角に黙つて坐ればひたりと當てるしをやらうと決心を固め爾來研究に耽ければ寢食を忘れて精進幾星霜、茲に近藤式觀相学の成立を見るに至つた事は誠に御同慶の至りに堪へない次第である。私は敢て御同慶と云ひ

度い。それは併后會員中幾多の名士が拙者の観力の元々危難を避け幸福をかち得るからであらうからである。

先づ此の研究を始めて以来随分苦しい思ひもしたし表面もした。中には随分人の好くないのが沢山居る。『サ』當てるしと無暗に拙者の目の先に手を突出して先ず拙者の心胆を寒からしめ拙者の断定を一々『左か、成程、ウー』と頷き『も』夫れ夫か、いや結構、全部當ってないしとすよして居る。此の手では随分やられたが然し、むを昨年あたりからこんな連中でも平気で撃退する事が出来る様になった。

全く始めはこんな場合に遭遇すると何んと弁解してよいか分らない。當って居ないと本人が云ふのであるから當って居ると云ふからには何等かの具体的證據をあげねばならず夫れは易学では射覆と称して殆んど此の奥儀に到達する事は到底五年や六年の修業では不可能な事であるからである。射覆の本當の意義は数を當てると云つたものであるが拙者に云はすれば蝦蟇口の中の錢を當てるばかりでなく廣く現実の事實を直接に云ひ當てるのである。例えば『君は過去に於て女道楽をやったね』なんては射覆でない。何処の何と云ふ娘さん

をだまして何処か費り飛ばしたね』とゆけば立派な射覆である。是れは僕の知つて居る限りでは数年前に死んだ人であるが神田今川小路に一戸を構えて居た爺様丈である。是れは或る書物で見ただのであるが拙者が觀相学に手をつけ出した頃死んでしまつたが恐ろしい鍊達の士であつたらしい。初て話を本道に於して上述の様な難物に出會つた場合の僕の逃げ口を發表する事とする。是れは何んでもない事である。『一寸も當ってない。』全部駄目だ』なんて相手が云つた場合は相手の顔をゲツと見てから『』と笑へば夫れでよいのである。是れが一番效果がある。周囲に聞いて居る連中は『野郎當つて居るものだから無暗にかくすんだな』と考へる様になる。此の『』は拙者の苦き経験が生んでくれた第一の賜物である。(以下次回に)

### 苗場山の麓まで (承前)

ストロウを囲んで早稲組むのパーティが晝食の包を拵げて居た。たつた一人の手軽な晝食を片附けながら二人の帰りは多分夕方だらう。其面どの方面へ向つたもんだらう?』と土地不案内の私

は思ひ感つたが、結局慈大の小屋さして登ればきつと途中でめどり會ふに相違ないと考へつゝ小屋を出た。幾組かのパーティによつて踏固められたシユプールは、樹の原始林の間を緩やかに登つていった。何時にどこまでといふ束縛もなく約一時間ばかり登高を繰り返してゆくと、俄然行手の樹の間がくれに一人の黒影が現れて矢の様に近づいてくる其顔を凝視すれば正しく近チヤンだ。

「マツ！ 孫サン……よく来たねー」

（彼が如何に感歎したかは前号の會報を参照あれ）繞いて現れた黒影一人、それは謙ぢやんだ。

忽ち私は踵を返して小屋さして爽快な林間滑走に移つた（とこう書いて来ると頗る体裁がいゝが、実は七転八倒の連続である）此時既に所謂「サン」ドイッチ「スキー」は開始されて居た。

小屋へ帰つて一休して、木曾屋敷へ登ることになり相談を纏め、各シールを張る。此登りは例に依つて奥野シールの故カ物凍く、さながら平地を行くやうな容易さで相當の急坂を苦むなく登つた。午後四時頃になると、今迄あたりにはちこめてゐた霧はくまなくはれて、胸もすき透るやうな碧空の下に、石膏細工かと思まごうばかりの上越国境の銀嶺は、折からの夕陽を浴びて薔薇色に輝き渡り、

其夕映の照返しは陽を背にした山套の斜面にたゞずむ一行の足跡を薄紅に染めた。おゝ、曾遊の八海山が見える！ 中ノ岳が！ 駒ヶ岳が！ あれが仙の倉だ。それあすこの四みか去年越えた三國峠だ！ 此息詰まるやうな銀嶺の大觀を何にたとへようか。

「えい、しまった！ 嚙真機を置いてきたし近チヤンは足踏してくやしがつてゐる。しかし心のフィルムに焼きつけた此ハイデルベルヒは永久に消えまいだらう。四時半、木曾屋敷の肩の下まで登つたが、帰途の急斜面を縫ふ林間滑走の困難が予想されるので登頂を断念して下降に移る。空腹と急斜面の粉雪と技術拙劣のトリオは登高とはうって変つて私をスキー地獄に突落した。北斜面の乾燥新雪は二人の名ラレナーにとつては雪のバクダイスだつたが、私によつては又しても白銀の乱倒だつた。へ尤も私のスキーはあるかなしかの横斜面になつても不思議な程速力を失はぬ（此点岩原から石打へのスキー行により村尾、曾田両氏の証明あり）蕭々の曲者へとは云ふが、これは謙ぢやんに心配して貰つた長岡製）なんであるから、粉雪と急斜面中に於ては容赦なく共しやすい主人公に反抗するのは當然であつた）一番弱つたのは

空暖だ。其上数日來の勤めの疲労と前夜の睡眠不足が手傳つて、何度粉雪中に埋没してしまつたとか！。それでも六時、無事に小屋に辿りつくことが出来た。其夜は殆んど前後不覚、綿の如く寂れて昏々と眠つた。

暖い小屋の二階の一夜は明けた。階下でストーヴを炊くので二階は春先の様に暖かく、外は零下十度といふ寒さに引かえて、室内は浴衣一枚でも居られる。今日もまぶしい程の好晴だ。大阪出張の用事を控えて早めに帰りねばならないので二人に別れを告げ、小屋で教へられるまゝにゲレンデの東の向山を経て鉢巻峠に向ふ。向山三角点附近から鉢巻峠へかけての緩斜面の處女雪に、雪煙をあげて降つた直滑降の快味は此スキー行中での白眉だった。難関鉢巻峠の降りも丹念なキツクターンの附の斜滑降によつて無事に降つた。大島まで来てみると案外時間が早くどうやら十一時半の汽車（予定よりは一汽車早い）に間に合ひさうに近づいてきたので、急ぎかけてゐる處へ折よく土地の（スキーヤー）緒になり芝原峠の登りも楽に終つて峠に立つた時は発車迄に五十分の餘裕があった。

頼れば苗場の頂は雪に蔽はれ始めて天気はどうやら崩れるらしい。此降りは去年の三圓峠越を如

えて二度目のことではあり、コースも知つてゐる。何の不安もない。彼の青年に跟いて快走三十分の後湯沢駅にスキーを脱いだ。上り列車まで十五分を餘して。

（七兵衛）

附記、此行は時間の餘裕がなかつたために、神楽は愚か木曾屋敷までも行くことが出来なかつた。然し、あの雪とあの小屋とあの棚の森を考へると、来年は是非悠り行つてみたいと思ふ。

### 會員登行記録

中川孫一 岩原スキー場より飯士越しに石打へ  
（三月十九日）

村尾金二、曾田莊太郎 全上（三月十七日—十九日）

松木謙三、中川孫一 外の川小屋を中心として四月二日神楽往復、三日木曾屋敷往復、中川氏の今年に於けるスキー行も此の六回目を以て終る。

奥野綱重、堀岡清 三月十日十勝岳スキー登山、誰が滑つても一針葉樹會員で僕が知つて居るスキーの出来る人なら一楽に廻転が出来ると何時も思ひます。苗場辺の重い粉雪で滑つて居る人々がつくづくお気の毒になります」と素晴らしい北海道の雪を自慢して居る。

### 新會員消息

昭和八年度新卒業生にて就職先き決定判明せるものは

高見 要 北海道拓殖銀行入行 (北海道室蘭)

田中 秀三郎 三菱商事燃料部入社

(住居 小石川区小日向台町二丁目二九番地)

鈴木英雄 北海道電燈東京本社勤務

(京橋区銀座四ノ三二富士製紙内)

電話京橋五七五一

太田又一 百貨店高島屋大阪難波支店勤務

丸茂平造 歸省家業に専心す

(甲府市柳町三。丸茂洋品店)

増山清太郎 龍門社青洲先生傳記資料編纂に關

係す(丸ノ内第一銀行本店内(電話丸ノ内一

五一—四三八)

加藤安吉 (専門部出身) 静岡縣浜松市板屋町

へ帰省せる由

### 會員消息

松木謙三 女子目出度出産さる (三月三十一日)

溪子と名付く。

### 磯野計藏

三月二十三日一橋山岳部員等多数の

見送りの中に東京駅發、二十四日神戸

出帆いよ／＼渡欧の途に着いた、船中北大山岳

部の人と同室し、晝よりビールを飲みながら話

はアルプスに、北海道の山に飛び、盡きぬ山物

語り長い航海も退屈しない由

### 會員通信

スイス日記旧版二部所持して居ますから御希望の方の一部譲ります、但し箱無し、

(増山清太郎)

### 編輯後記

前編輯者松木さんの跡をうけ足掛け三年間どうやらやりました、いよ／＼今度山一証券の小川竹夫君が次号から引受けて下さいました、又會計の方は園山徳三郎、金田一郎の両氏から鈴木英雄君が引つぎました、よろしく願ひ致します

(手塚)